



200 年以上使われた書類筆筒

尾崎 泰弘

この筆筒は、幅 63.5 cm、奥行 41 cm、高さが 75.5 cm で、全体的に黒くくすんでいます。上から 3 段目の引き出しを開けてみると、底には次のような文字が書いてあります。



書類筆筒



上から 3 段目の引き出しの墨書



絵葉書「東吾野村役場並産業組合事務所」
(昭和初期)

「武州高麗郡上井上村諸帳面入 安永三年甲午五月造之 名主重甫 組頭藤兵衛 同断常右衛門・新左衛門・権次郎・源蔵 工人馬場村喜兵衛」
つまり、これは今から約 250 年前の安永 3(1774)年 5 月に、上井上村で村の運営に必要な帳面(文書)を収納するために、馬場村(毛呂山町)の工人喜兵衛に依頼して製作したものであることがわかります。安永 3 年といえ、10 代将軍家治(吉宗の孫)の治世で、田沼意次が側用人として権力を振るっていた時期にあたります。

また右上には「備品」と印刷された紙片が貼られています。横書きの文字が左から右に書かれていますので、これは戦後に村役場の備品として管理するためのものと考えられます。一方、当館には昭和 50 年代に東吾野村役場庁舎より収集してきた古文書が収蔵されています。その中には、井上村を含む明治 22(1889)年に東吾野村となった近世の村の文書も数多く含まれています。

以上から考えられるストーリーはこうです。安永 3 年に製作されたこの筆筒は、上井上村を運営するために必要な文書が収められ村役人を務めた家で管理されていた。明治 22 年に東吾野村ができると、村の事務を円滑に進めるため合併前の近世の村文書を役場に提出させ、井上村では文書をこの筆筒とともに出した。それを役場庁舎が使われなくなった昭和 50 年代に飯能市史編さん事業で収集し、当館に引き継がれた。一方筆筒の方も教育委員会によって東吾野村役場の建物から民具として収集されそれが当館に移管された、と。

よく見るとこの引き出しの表側には、防水・防腐の効果がある柿渋が塗られています。そして筆筒の材料は桐です。桐は多孔質材のため軽く、その引き出しの中は温湿度の変化が少なく、しかも着火温度が高いため燃えづらくなっています。また

底には幅 5 cm、厚さ 2 cm ほどの平らな木材が打ち付けられ、筆筒の底と設置してある接地面との間に空間を設け湿気がこもらないようにしています。収納された文書が劣化しないよう様々な工夫がされていることで 200 年以上もの間使用され続けたのです。

【参考文献】

東吾野郷土研究会『東吾野郷土誌』昭和 45(1970)年 8 月/飯能市『飯能市史(資料編Ⅳ) 行政一』昭和 55(1980)年 11 月/飯能市秘書広報課『飯能市史編さん事業完了報告書』昭和 63(1988)年 3 月